

よどじん

「病児保育サービスなんて必要ない。
そんな世の中を願いながら、病児保育をしています。」
そう語るのは、淀川区の

訪問型病児保育事業のパートナー 「NPO法人ノーベル」

代表理事の

高 亜希さん

保育は「ひと」

ある日の夕刻、区役所で開催された病児保育利用者説明会で、仕事帰りの保護者に向け、自らマイクを持ち細部まで説明する高さん。代表自らが説明されるんですねと問いかけると「保育は『ひと』。私たちがどういう団体で、どんな活動をしているのかを語るには、代表自らがその場に立たなくてはならない」そう言い切る。

自分の存在意義

大学を卒業後、大手旅行会社などで営業職として活躍。順風満帆なキャリアを積み上げながらも、社会人3年目頃から、ふとある思いを募らせる。

自分の存在意義は何なのか

「仕事は楽しかったし、これといって不自由はなかったんです。でも10年後の自分の姿を想像したとき、いったい私は何をしていた、社会に対しどのような役に立っているのだろうかと考え、先



が見えなくなったんです」

道に迷い、自問自答を繰り返す中、自分の存在を見つめ直すために仕事を辞め、海外に語学留学する。

現実を知る

海外での語学留学中、まわりにいた社会人6~7年目の女性が、結婚し子どもを産み、そこで仕事を辞めていく。「本当は仕事をしたいんじゃないの?」そう感じていた。

しかし、よく話を聞くと、「子どもが熱をだして1週間仕事を休んだら、同僚から白い目で見られた」「子どもが病気でも預けられる祖母も近くにおらず、どうにもならない」現実を知る。

それならば預かれればいい

病児保育を学ぶ

そこからの人生は何か突き動かされるように進む。

病児保育が必要と感じ、インターネットで検索すると東京にあるNPO法人「フローレンス[※]」の名。

これだ!と思い、迷わず東京に飛ぶ。「無給でかまわない。ここで働かせてほしい」

交渉の結果、半年間インターンシップ(就業体験)で働けることになる。

残りの半年はお給料をもらい、結果



子どもを産んでも働き続けられる社会



◀保護者に利用説明をする高代表

※認定NPO法人 フローレンス <http://www.florence.or.jp/>